

ヒーリング効果を目指した インスタレーションアートの研究と制作

Research and production of healing installations

上田真央

Mao UEDA

名古屋大学大学院情報学研究科複雑系科学専攻

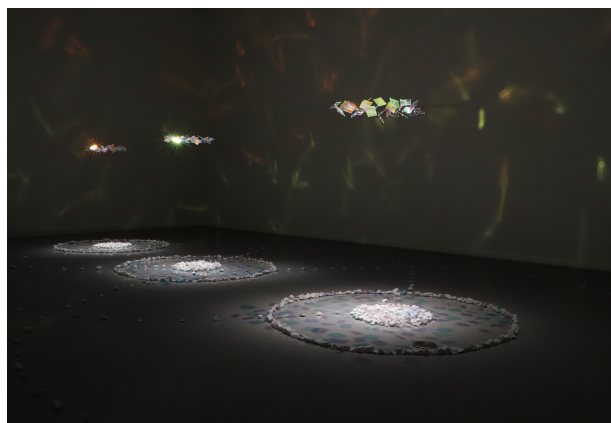
* Nagoya University, Furou-chou, Chikusa-ku, Nagoya-shi, Aichi 464-8601, Japan

1. 序章

インスタレーションは、70年代に一般化した現代美術における表現手法の一つであり、主に展示空間全体を作品として表現する視覚芸術の一つである。環境・空間・時間などの特性と関係性を強調し、モチーフの概念や歴史性の意味を、作品を通して深く意味付ける。

一方、後で述べるように、筆者はヒーリング効果に強い興味を感じている。ヒーリング効果が得られるインスタレーションというものを考える時、どのような状況でそうした癒しの効果が得られるのだろうか。アート作品は鑑賞者によって様々な受け止め方があり、多くの人に同じ受け止め方をしてもらうことは困難だが、素材・表現方法・展示環境によっては、ヒーリング効果を与えられる仕組みを一定数の鑑賞者に向けて計画し、表現できるのではないかと考える。

こうした前提で、筆者による既出作品数点を辿りながら、筆者の取り組みについて述べる。



図版1 上田真央「sea circle」2021年/8月
オーロラフィルムと軽石によるインスタレーション
W5,000×D8,000×H4,000mm

1-1. 研究制作背景と目的

日本は現在、高齢人口の急速な増加の中で、医療福祉などの問題に対応することが課題となっているが、その高齢者をケアしている第三者や親族の精神的ケアが疎かになっている点も課題と感じる。ヒーリング効果が得られるアート作品を制作し展示をする事で、鑑賞者のメンタルをケアする事を目指す。自然環境から人間へのある種の作用には、ヒーリング効果が認められると言われているが、その中のどんな作用でヒーリング効果が高いのかを調査・研究する。そこで得られた結果に基づき、自然環境の作用が空間的に体感できるインスタレーションアートの表現を目指す。自然環境とその作用を模した人工的な展示空間や素材の効果によっても、同様のヒーリング作用が得られるのかの実験を重ね、研究・制作を進めていく。

2. 本研究のストーリー

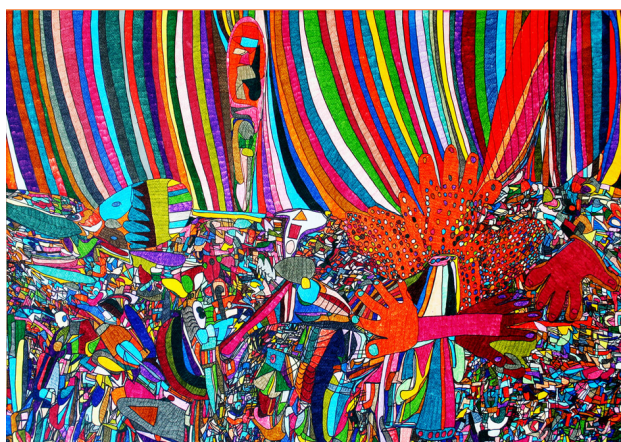
ヒーリング効果の研究・調査と著者の既出作品について考察し、作品の背景・プロセスをまとめ写真と共に記す。

2-1. アートとヒーリング効果

芸術作品に限らず、何かを描いたり作ったりする行為にはヒーリング=癒しの効果があると言われている。作品制作は、一定の論理性が求められる言語コミュニケーションと異なり、非論理的であることによって言語コミュニケーションにはない効果が存在すると思われる。たとえばアール・ブリュット（アウトサイダー・アート）と呼ばれるジャンルがある。既存の美術・芸術の文化潮流とは無縁の知的障がい者や精神疾患を持つ人々によって制作された芸術作品の意味であり、彼らは一般的な芸術の動向に左右されず自分の感情や精神内容を直截に表現するが、こうした行為の結果として彼ら自身を癒す効果があると言われている。これは美術教育における心理治療の側面である自己治療力と似ており、畔柳和枝著の『アールブリュットの治癒と創造性—芸術教育の見地から』では、「中でも絵画表

現は、潜在的な心の中のイメージを導き出す役割を果たす。特に感情を引き出す効果を持つ色彩は、デッサン（のようなモノクロームの表現/*著者注）では言語化できないものの表現を可能にし、覚醒を促す。このように芸術体験を通して、自由と創造性と表現とのつながりが、人間本来が持つ『自己治癒力』を再び取り戻すことが可能になる」

※1 と述べられている。創作行為にヒーリング＝癒しの効用がある一方、既に述べたように、作品を鑑賞する行為、作品を体験する行為にもヒーリング効果＝癒しの効用が得られることが知られており、アートによるヒーリングの様々な試みが行われている。筆者は1/f ゆらぎと生体信号をキーワードにし、ヒーリング＝癒しの効用を有する作品の制作を行なった。



図版2 八重樫 道代「カウントダウン21世紀」2001年

2-2. 自然環境がもたらすヒーリング効果

本項目では、主に<自然>にフォーカスし記述していく。<自然>は人間の身体面において、ストレスホルモンの低下や副交感神経活動を昂進し、交感神経活動を低下させる効果があると言われている。心理面においては、気分状態が回復する・ポジティブな感情思考に移りやすいと言われている。体内の免疫細胞であるナチュラル・キラー細胞の活性が昂進し体内の免疫能力が高まることも明らかになっている。また、厚生労働省が管轄している国立病院機構では、病院内に<緑>を多く取り入れ、病院利用者の抱える不安やストレスなどを緩和させる「ガーデンホスピタル構想」をすすめている。これは擬似的な自然環境であっても不安やストレスが緩和されるということを前提にした試みと言える。また、2017年2月に発表された浅野博善の作品「Virtual Reality System Box」では、和歌山県の南紀白浜（白良浜）の波打ち際の映像を魚眼レンズで撮影した映像作品である。この作品は、プロジェクションマッピングで床面・壁面に投影した作品であり、2画面のモーションはリンクしているため、壁面の映像で波が手前に来

れば床面も手前に向かって水が押し寄せる。逆に、壁面の映像で波が奥に向かえば、床面も奥に向かって水が退いていく映像作品となっており、自然と体が波を避けるような動きをしてしまう。

このように、自然現象をデザインとして取り入れた創作物も発表されている。

2-3. 1/f ゆらぎによるヒーリング効果

自然環境には、人間が心地よく感じる「1/f ゆらぎ」を有する現象が多くみられる。例を挙げると、火・年輪・心拍・メトロノーム・川のせせらぎ・鳥の囀り・ホタルの光 [1, 2]・オーロラ [3]などが挙げられ、先行研究 [1, 2, 3]では、①自然現象の解析を行う。②自然現象の解析結果が1/f ゆらぎの傾斜に近いか検証を行い、癒しの効果の有無を検証している。

[1, 2]では、ホタルの発光パターンを画像処理や統計処理などの工学的技法を駆使し発光現象の計測・解析を行なってみた。また [3]では、[1, 2]を参考にオーロラ発光パターンでも同様の実験を行った。

オーロラの発光パターンの動画データを静止画に変換し、オーロラが誘発する光の色相・彩度・明度・輝度のゆらぎ構造を、離散スペクトル解析・ウェーブレット解析・Semantic Differential Method 法 (SD 法) を用いて実験を行ったところ、オーロラの発光パターンには、広い周波数域に亘って1/f 傾斜に極めて近いことが判明し、オーロラ発光でも1/f ゆらぎが確認された。他にも [4, 5, 6]でも1/f が確認されている。

このように、自然環境には1/f ゆらぎで満ち溢れていることがわかる。1/f ゆらぎが確認できるということは、伴って癒しの効果も有するといえる。

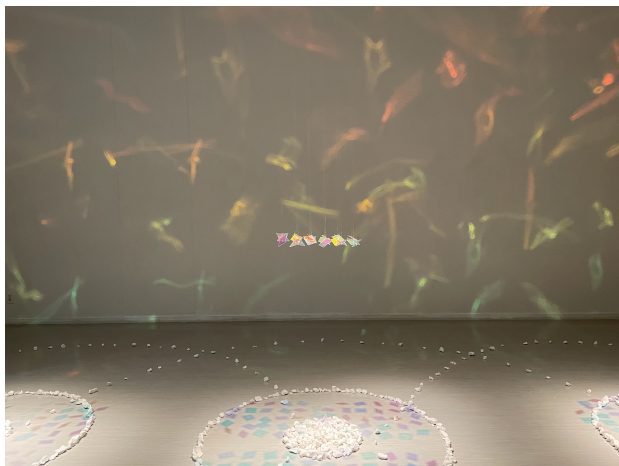
3. 作品の構想

筆者が目指すインスタレーションアート作品では、人工的な素材を人為的に構成し、そこにヒーリング効果の高い自然環境の作用の一つを取り込む。それにより「ガーデンホスピタル構想」同様、鑑賞者の不安やストレスが緩和すると考える。インスタレーションアートは様々な素材と技法を採用するジャンル（ミストメディア）である為、具体的な素材や技法については、実験の中で、作品・空間・鑑賞者が共鳴することを目指し選び取って制作した。

2021年8月に名古屋市民ギャラリー矢田名古屋大電脳博覧会にて展示した『sea circle』は、今回作成したアート作品のうちの一つである。本作品は、オーロラフィルムとプラスチック板を組み合わせた作品である。スポットライトから発した光がフィルム面で反射し、反射光が壁面に投影され、反射しなかった光は床に落ち、水面を切り取ったような透過光を楽しむことができるインスタレーション

作品である。

作品付近を歩行すると、歩行時に発生する微風により作品が揺らぐ。その揺らいだプラスチック板が光に反射し、壁面に投影される。歩行と、歩行のスピードは1/f ゆらぎと言えるだろう。作品本体の揺らぎと、反射光の揺らぎはリンクしている為、鑑賞者の動きが増幅された反射光のリズムとなり、壁に投影される仕組みである。



図版3 「sea circle」2001年/8月

オーロラフィルムと形跡によるインスタレーション 反射光の様子

実際に、ギャラリーに訪れた高齢者の方に、この作品のキャプションを伝えた上でアンケートを行ったところ、「海じゃないのに海の中にいるみたい」「不思議と泳ぎたくなってきた」などの回答が得られた。他に、ギャラリーに訪れた子供を持つ夫婦などに「子供と海に行きたいね」などの感想もいただいた。アンケートを総合的に見ると、精神的負担の軽減・穏やかな雰囲気への回答を多く頂いた。この作品をきっかけに、空間で鑑賞者を癒す効果があると考察した。

謝辞

本研究に関してご指導ご鞭撻を賜りました、名古屋市立大学作間敏宏教授のご厚情に感謝申し上げます。また、研究につきまして様々な助言を頂きました本学作間研究室の皆様をはじめ、様々な面でご支援いただきました家族と友人に感謝いたします。最後に、制作の協力をして頂きましたアルバイト先の皆様をはじめ、高校時代の友人・大学時代の友人に厚くお礼申し上げます。

注記

第2章 ※1. アールブリュットの治癒と創造性—芸術教育の見から/畔柳和枝

<http://ejiten.javea.or.jp/contenta871.html?c=TKRBek1ESTE%3D>

参考文献

- [1] 阿部宣男, 稲垣照美, 石川秀之, 松井隆文, 安久正紘: 蛍の光と人の感性について-発光現象の揺らぎ特性- 日本完成工学会論文誌, 3(1), pp. 35-44, 2003.
- [2] 干場恵美子, 稲垣照美, 木村尚美, 阿部宣男, 宮内一美: ホタルの発光パターンにおける色相の1/f ゆらぎ現象と癒し効果, 日本機械学会論文集 C編, pp.109-117, 2005
- [3] 日本富士雄: 図説感性工学の基礎, 日本書房, pp.55-72, 稲垣 照美, 穂積 訓: 極北オーロラ発光のスペクトル解析と感性評価, 日本感性工学会論文誌 2022.
- [4] 武者 利光: 1/f ゆらぎと快適性 (<小特集>快適性向上を求めて), 日本音響学会誌, 50 (6) pp. 485-488, 1994
- [5] 岩崎寛: 病院緑化から見た緑化分野における「健康」に関する研究の必要性, 日本緑化工学会誌 33 (3), 448-450, 2007